



巻頭言

『裾野からみる国際リハビリテーション』

村瀬順二 (一財)名古屋市療養サービス事業団
国際リハビリテーション学編集委員

[巻頭言]
『裾野からみる国際リハビリテーション』

村瀬順二

[特集]
『World Physiotherapy Congress 2025』

横山美佐子
三田村徳
濱田光佑

[連載：研究万華鏡]
『英語論文 奮闘記』
齋藤崇志

[コラム：世界のめがね]
『行動が変わったとき、支援が届いたと感じた』
山本啓太

今年も暑い夏がやってきます。私は山が好きで、毎年夏に日本アルプスを目指しますが、富士山は眺める方が好きです。美しく滑らかに広がる裾野に、自らの立ち位置を重ねて思うことがあります。

2011年、JICA海外協力隊から帰国し、海外でのさらなる活動を思い大学院で開発学を学びました。一方で、再就職の場として選んだのは訪問リハビリの分野でした。国際性からは距離を置いた領域ではありましたが、在宅ケアの奥深さに魅了され、以来、その世界に没頭し続けています。

皆様の中には、海外の第一線でご活躍されている方、研究や活動を通じて継続的に関わっている方、そして普段は関わらずとも、この分野に関心を持ち続けている方がいると思います。私自身、この国際リハビリテーション分野においては裾野の一角に身を置き、遠く皆様の活躍を眺めているような感覚で過ごしていました。

ところが近年、当会学術誌の編集をお手伝いさせていただく機会を得て、2026年に愛知・名古屋で開催されるアジア競技大会への関わりも持ち始めています。細くとも長く、遠くからでも関心を持ち続けることで、思いがけないご縁や新たな機会へとつながることを実感します。

研究会の発展に寄与するべく、会員の裾野がさらに広がることを願っております。そして、その広がりが国際リハビリテーションの未来に向けた新たな可能性を育んでいくことを期待しています。

【特集】

World Physiotherapy Congress 2025 Tokyo

本号では「World Physiotherapy Congress 2025 Tokyo」と題し、国際学会に企画運営、発表や参加した理学療法士3名による寄稿をお届けします。世界127か国・約4,000人が集うこの一大イベントにおいて、各執筆者が体験した学びや交流、そしてグローバルな理学療法の潮流について、それぞれの視点から綴っていただきました。

世界と共につくる理学療法のかたち

横山美佐子

(北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科理学療法学専攻)

このたび、2025年5月に東京で開催された World Physiotherapy Congress 2025 において、Congress Programme Committee(CPC)の一員として活動する貴重な機会をいただきました。初回の会議は2023年12月にロンドンで開かれ、世界各国から集まった理学療法士たちと、ホテルに缶詰めになりながらも熱い議論を交わしました。私にとって最大のチャレンジは英語での意見交換でしたが、日本の現状や課題を伝える中で、言葉の壁を越えた対話生まれ、文化も背景も異なる仲間たちと、互いに尊重し合いながら協働できたことは、かけがえのない経験でした。

この18か月間、毎月の会議を通して、臨床・教育・研究・政策といった多様な視点を持ち寄り、「今、世界が求める理学療法とは何か？」を問い続けてきました。テーマ設定や演題査読を通じて、理学療法の役割の深さと広がりを実感しました。

今回は、日本の取り組みをもっと発信したい気持ちもありましたが、ディベートなどハードルが高いと感じる場面もありました。また、世界127か国から4,000名以上が参加する中、日本からの参加者は約900名にとどまりました。参加費の高さもあり、興味があっても参加できない現実があることも課題のひとつだと思っています。

この経験で得た学びや気づきは、今後、仲間と共有しながら少しずつ日本の理学療法に生かしていければと願っています。世界とつながる中で視野を広げ、私たち一人ひとりが、地域や暮らしに寄り添う理学療法のあり方を考え続けていくことが、未来を形づくる一歩になるのではないのでしょうか。



World Physiotherapy Congress 2025 参加・活動報告

三田村徳

(国際リハビリテーション研究会 広報担当、東北医科薬科大学病院)

World Physiotherapy Congress 2025 (以下、WPC)に参加し、ポスター発表やボランティアの機会をいただきました。世界127ヶ国から理学療法士が一堂に会し、組織や臨床・研究の最前線に関する情報交換や意見交換が活発に行われる、非常に刺激的で学びの多い場でした。Networking や Idobata session など特徴的な企画も多く、他国の理学療法士と社会課題への取り組みや地域医療の実践について熱く語り合うことができました。言語や文化を超えた連帯感の中で、「国際リハビリテーション」の可能性と意義を改めて実感する貴重な体験となりました。

ボランティア活動として、「ラジオ体操」のインストラクターも務めました。丸の内の会場には200名以上の参加者とともにラジオ体操をしました。ともに身体を動かすこのひとときは、日本文化と健康づくりを融合させた新しい国際交流の形として、大きな反響を呼びました。

また、特別企画では「Building the future of education: global education standards for entry level physiotherapist education and lifelong learning」のセッションへ参加し、世界標準の理学療法教育カリキュラム、生涯学習や開業権など、グローバルな教育と制度の動向について理解を深め、大変刺激を受けました。

WPCを通じて、国際的な志を持つ多くの仲間と出会い、未来とその可能性に改めて胸が高鳴りました。そして、国際リハビリテーション研究会のメンバーの皆さまとも現地でお会いできたこと、とても嬉しく心強く感じました。今後もこうしたつながりを大切にしながら、国内外のリハビリテーションの発展に貢献していきたいと思います。



World Physiotherapy Congress 2025を終えて

濱田光佑（愛知医療学院短期大学）

今回、World Physiotherapy Congress 2025に参加する機会を得ました。私は発表者としてではなく、あくまで参加者として臨みましたが、その体験は非常に有意義なものでした。世界各国から理学療法士が集うこの国際会議は、学術的・臨床的視点にとどまらず、理学療法の社会的意義や国際的潮流を肌で感じる貴重な場となりました。

特に印象的だったのは、日々研鑽を積む友人たちが堂々と発表に臨む姿でした。彼らの準備の過程や研究の深まりを間近に感じ、大きな刺激を受けました。また、各セッションを通じて、各国の理学療法士が直面する課題や取り組み、医療制度や文化の違いが理学療法の実践に与える影響について深く考える中で、国内を中心に活動してきた私にとって、グローバルな舞台で発信することの重要性と意義を改めて実感する機会となりました。そして、国境を越えた専門的対話の中に、自身の研究の可能性があることを強く感じました。

また、会場では新たな出会いも多く、長らく交流のなかった旧友との再会もありました。これらの出会いは専門職としての視野を広げ、今後の連携にもつながる貴重な財産です。加えて、世界中のセッションを聴講する中で、自身の研究に対する関心や探究心が深まり、次なるステップに向けた明確な目標を得ることができました。国際的な議論の中で自らの専門性の立ち位置を見つめ直す契機ともなりました。

今回の学会参加は、理学療法士としての現在地を見つめ直し、未来への課題と希望を得る契機となりました。



[連載] 研究万華鏡*

Inspiration for your research

英語論文 奮闘記

英語で論文を書く—この難攻不落の課題に初めて挑んだのは、大学院生の時でした。生まれも育ちも日本、留学経験なし、海外在住経験なし、英検3級の私にとって、途方もなく高い壁に感じられました。

論文に載せるデータは既に揃っている。論文のストーリーも、ある程度、整理できている。あとは、英語で書くだけ…。しかし、どのように書けばよいのか、さっぱり分からない。何時間もパソコンの前に座り、うんうんと悩んだ挙句、英語で入力できたのは自分の名前と所属施設だけという惨状でした。そこで、私は、開き直りました。「無い知恵を絞っても仕方がない。過去の偉人のマネをしよう」と。

私が行った作業は、①執筆しようとしている論文と研究テーマや研究デザインが似ている過去の英語論文を10本ほど集める、②その中から、自分の論文にも使えそうな文章表現をノートに書き出す、③ノートに書き溜めた文章表現のストックを参考に、剽窃とにならないよう注意しながら、自分の論文の文脈に合わせて修正して組み合わせる。文章のパッチワークのようなこの作業を続け、なんとか体裁を整えたのが、私の初めての英語論文でした。

それから10年近い月日が流れました。今でも、英語での執筆は大変な作業です。ただ、初体験の時と比べれば、少しはスムーズになりました。継続は力なりといったところでしょうか。英検3級の私でも、やり続けていくと、少しずつできるようになります。英語で論文を書こうか迷っている方、その挑戦の真っただ中で苦しんでいる方にとって、「こいつもできたのだから、自分もなとなる」と、英語論文に挑む力となれば幸いです。

（国立障害者リハビリテーションセンター研究所 齋藤崇志）

【コラム】『世界のめがね』

世界中で活躍を展開している
会員のめがねを通した
世界の姿を各号お届けします



国際協力の現場で働いていると、思いがけず嬉しさを感じる瞬間があります。私は2020年からカンボジアで障がい者支援に携わっているのですが、昨年からは女性省と連携し、障がいのある人でも職業訓練校に通えるようにする事業を進めています。バリアフリー工事や物品の更新、職員への研修などを行いました。

そんな中、研修に参加した用務員のおばちゃんの行動に感動する出来事がありました。ある日、受講生の若者たちに聞き取り調査をしていた際、「学校を中退して家にいたら、突然あのおばちゃんが家に来て、『うちの職業訓練校において』と誘ってくれた」と口々に話してくれたのです。

そこでおばちゃんに話を聞いてみると、「あなたたちの支援のおかげで、トイレが使えるようになったし、ミシンも新しくなった。今なら自信を持って受講生を迎えられるから始めたの」と言ってくれました。今では、施設の管理から受講生の募集・送迎まで、幅広く活躍してくれています。

当初、用務員のおばちゃんは事業の対象者に含めなくてもよいのではと考えていたのですが、思いがけないところにキーパーソンがいることを実感し、国際協力の面白さを改めて感じた出来事でした。

(AAR Japan[難民を助ける会] 山本啓太)

【お知らせ】

【国際リハビリテーション研究会第9回学術大会】

テーマ：グローバルヘルスにおけるリハビリテーションの挑戦

日程：2025年12月14日（日）9:30～16:00

会場：JICA地球ひろば（東京都新宿区市谷本村町10-5）

参加費：会員2,000円 非会員3,000円 学生1,000円

学会HP

※一般演題登録、参加登録については、HPをご確認ください。

【学術誌『国際リハビリテーション学8巻1号』投稿論文受付中】

投稿締切：2025年8月11日(月)

詳細については[HP](#)をご確認ください

編集後記

本号ではWPC2025を特集として取り上げました。私は会場に足を運ぶことが出来ませんでした。記事を見直し交流を通じて各国の理学療法の強みや課題が見つかる貴重な機会であったと感じました。次回メキシコ...参加したいですね！（古川雅一）

WPC2025は、日本のリハビリテーション専門職がその活動成果を発信する機会であると同時に、専門職としての視野を広げ国際的な活動への意欲を喚起する学会でした。私自身も国際保健分野に挑戦する一人として、誰かの背中を押せる存在でありたいと強く思います。（濱田光佑）

事務局 編集担当

大西 海斗（開発コンサルタント）

長田 真弥（株式会社メディファール）

佐久間 善子（London School of Hygiene and Tropical Medicine）

高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊、チリ派遣）

寺村 晃（大阪保健医療大学）

成田 徹平（東北大学病院）

濱田 光佑（愛知医療学院短期大学）

古川 雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

JSIR HP



【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>
【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局
jsir.office@int-rehabil.jp